

博物館だより

第71号

2008. 3. 31

Nagano City Museum

戸隠地質化石博物館特集



7月の開館めざして!

茶臼山自然史館と戸隠地質化石館を統合し、新しい自然史分野の博物館が今年の夏にオープンします。この館は、廃校となった柵（しがらみ）小学校の校舎（鉄筋コンクリート3階建て、床面積約2700㎡）を改築して整備されます。昨年末に、エレベーターや多目的トイレが設置され展示施設への改築工事も終わり、館へ引き渡しになりました。

現在は、資料の引越しや展示工事が進められています。この館では、戸隠で見つかる約400万年前の化石を出発点に展示が始まります。昔、海だった長野が長い年月をかけて、現在のような山間地になってきた大地の歴史を学べるように展開します。さらに、関連する自然に関する資料も展示し、学習できるようになっています。

勤務するスタッフは地質・化石の他に動植物の担当も含めた5名です。戸隠の豊かな自然を生かしながら、長野周辺の動植物などを総合的に学ぶ活動を行っていく予定です。



柵小の資料を保管する学校資料室



これから引越しを迎える収蔵庫

こんな館になります

新館は3階建ての校舎を利用したもので、「ミドルヤード」をつくらうという発想で設計が行われました。これまで、博物館が目指してきた「見やすくわかりやすい展示（フロントヤード）」に加え、「収蔵庫（バックヤード）で保管するもっとたくさんの資料の魅力を伝える場（ミドルヤード）」をつくる、というものです。常設展示室を思い切って3階に置き、2階は収蔵庫でありながら来館者にも見ってもらう場でもあるのです。1階は、職員やボランティア、来館者が集い、学ぶ場と設定しました。こうした意図のもとで機能をわけ、人や資料の移動をスムーズにするためにエレベーターを設置しました。

まず、海だった長野を印象付けるため、玄関ホールには体長8.5mのミンククジラの全身骨格や2トンの化石岩塊を展示します。そして、来館者は3階の展示室へ移動することになります。

第1展示室では、ダイカイギュウやナウマンゾウの全身骨格が待っています。ダイカイギュウは、ジュゴンの仲間ですが、体長7m以上もあった種類です。戸隠で日本最初のダイカイギュウ化石が発見されたことにちなんだものです。今回の展示の目玉ともいえるものです。

そして第2展示室では、天井からつるされたホホジロザメの模型が待っています。その他、ホタテガイやアワビ、サルボウなど戸隠に生息した海の生き物たちについて学びます。ここでは、400万年前の長野をジオラマで再現したり、海生動物の生態を映像で流したりします。

第3展示室は、教室をつなげた広さを生かし、海だった長野がその後隆起し、飯縄火山の噴火や

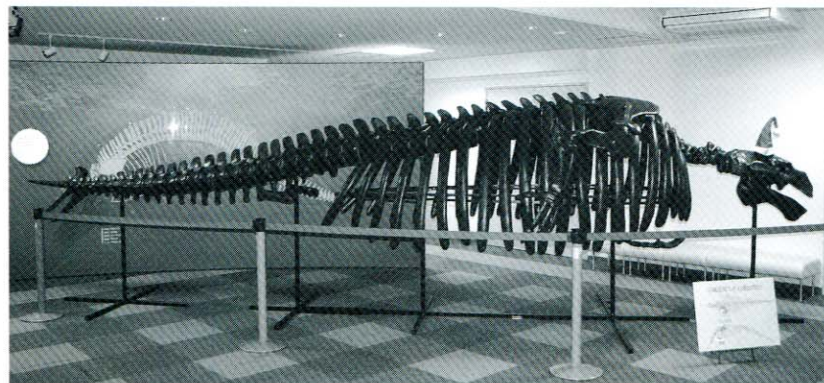
断層によって盆地が沈んでいく大地の物語を紹介します。大型地形模型や善光寺地震を起こした活断層のはぎ取り資料などを展示します。

第4展示室では、時代ごとの代表的な化石を展示し、化石が語る生命30億年の歴史を紹介します。そして、第5展示室では、長野周辺の特徴的な自然を展示します。大地や生命の長い歴史（過去）を知り、現在の自然の成り立ちを学び、その知識をもって野外に勉強しにいこう！というストーリーで構成されています。

2階は、来館者が資料と向き合うことのできる“ミドルヤード”の場です。化石や骨格標本などの収蔵スペースとなりますが、来館者にもその中に入ってもらって、その魅力にふれてもらう場にしたと考えています。化石のクリーニング室、生物標本の作製や水棲動物たちを飼育・展示するワークルーム、図書室（1階）も設けられ、学びの場ともなるスペースです。自らの体験を通して学ぶ館として、活用していただきたいと思います。



理科室はクリーニング室として利用



展示されるダイカイギュウ骨格（全長7m）札幌市博物館活動センター所蔵



校長室は図書室へ変身

雰囲気ある館をめざして

新館整備は地域のシンボリック的存在であった小学校の雰囲気も残したいと思っています。子どもたちの学びの場であったことを伝えるため、学校資料室を設けたり、古い机や椅子や木製の棚なども積極的に利用したりしています。ボランティアの方々にも協力を得て、60年前の古いガラス窓や廃棄の黒板なども見事な作品によみがえっています。旧・地質化石館のもつ"手作り感"あふれる博物館にしたいと考えています。市内の学校にも協力いただき、懐かしい学校資料なども集まりつつあります。知恵と工夫を生かし、皆さんに楽しんでいただく趣向をこらしています。(田辺智隆)



体験教室の場、キュラトリアルワークルーム



展示をまつ資料たち 動物関連の収蔵室

引っ越し作業を手伝ってくれるボランティアを募集しています。くわしくは、戸隠地質化石博物館 (TEL252-2228) までおたずね下さい。



廃棄黒板も展示台へ再生!

ありがとう 地質化石館

11月末日をもって、戸隠地質化石館は閉館となりました。郷土資料館として昭和55年(1980)11月23日に開館以来27年間の歴史を閉じることとなりました。昭和24年(1949)に柵中学校校舎として建築されて約60年間、地域のみなさんに親しまれてきた建物もようやく役目を終えようとしています。

松代地震では支えが必要だった建物は、平成6年(1994)には屋根の4分の1が強風で吹き飛びました。中越沖地震でもひどく揺れたのも思い出の中に残ります。床の一部は壊れ、すきまだらけのとても寒い建物ですが、これまで化石や岩石の重みによくぞ耐えてくれたと感謝しています。日本一ポロくて「化石」のような建物でしたが、暖かみのある雰囲気は、多くのお客様に愛されたと思

います。新館がオープンして役目が終わるまで、あと半年、もう少しがんばってほしいと思います。(田辺智隆)



中学生が大発見！

裾花川から絶滅したクジラの化石が

2006年8月11日、長野市立広徳中学校2年生だった青木隆宏さんが、善光寺温泉近くの裾花川河床において、大きな動物の骨化石を発見しました。一緒にいた久保是彦さんは、小学生や高校生の頃に、この近くでクジラの化石を掘ったことがあるので、「クジラかな？」と思ったそうです。とにかく二人で発掘し、持ち帰ってクリーニングを行いました。その後、昨年5月、この化石は戸隠地質化石館に寄贈されました。

詳しく調べると、残存長約130cmもあるヒゲクジラの右下顎骨化石でした。一部は欠けているものの関節突起（頭骨に関節する部分）や下顎孔（神経・血管の通る管の入口）、オトガイ孔等はよく残っていました。化石が産出した善光寺温泉付近の泥岩層は小川層とされ、約600万年前のものと思われます。下顎孔の大きさ、関節突起や筋突起の形などの特徴や地層の年代からみて、絶滅したヒゲクジラの仲間ケトテリウム科のものと判定できました。よく似た化石が北海道や埼玉県、岐阜県等から産出しており、今後比較することで、詳しい種類が明らかになるでしょう。下顎骨の大きさからみて、全長6~7m前後のクジラと推定されます。

これまで、県内からは多くのクジラ化石が発見されていますが、断片的なものが多く、種類が判別したものはそう多くはありません。主なものとして、上田市産のシナノイルカ骨格（マイルカ科：約1500万年前）、松本市四賀産のシガマッコウ全身骨格（マッコウクジラ科：約1500万年前）、信

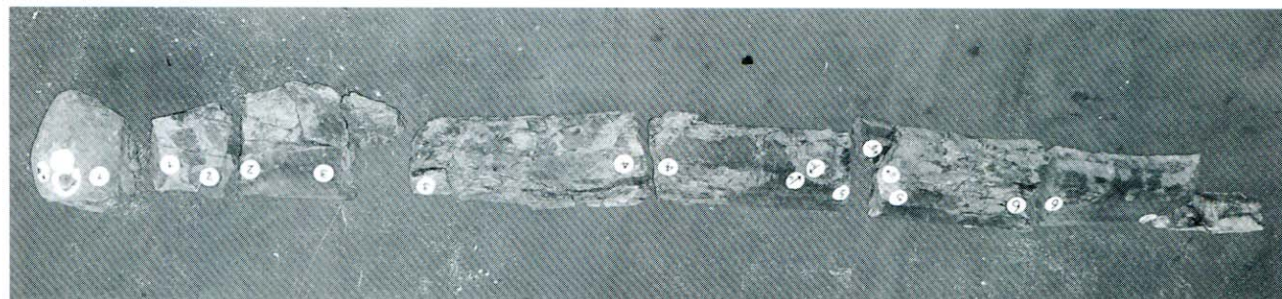


クジラ化石の発見場所 長野市小鍋 裾花川河床
青木隆宏さんが示しているのが、今回の化石
写真提供 久保是彦さん

州新町産のシンシュウセミクジラ頭骨（セミクジラ科：約600万年前）、中条村産のナガスクジラ科下顎骨（ナガスクジラ科：約500万年前）などがあります。ケトテリウム科の化石としては長野市戸隠産の下顎骨（約400万年前）について2例目で、県内で今のところもっとも古いケトテリウム科の化石と思われます。

約600万~500万年前の県内の地層からは、これまでにセミクジラ科、ナガスクジラ科の化石が見つかっており、今回のケトテリウム科を含め3種類のクジラが生息していたことが明らかとなりました。当時の海洋の環境を考える上で、複数の種類のヒゲクジラ類が生息していたことは、大変興味深い事実です。まだ、その正体がよく突き止められていないクジラである、ケトテリウム科の進化や生態を明らかにするための貴重な資料となることでしょう。

この化石は、新館の一つの目玉として展示されます。市内の中学生が発見し、自分の手によって発掘した貴重な化石ということもあり、子どもたちに夢を与える資料となるでしょう。（田辺智隆）



今回発見されたケトテリウム科の右下顎化石（残存長約130cm、高さ約15cm）クリーニング終了後のもの
（写真提供 久保是彦さん）

お正月の道祖神祭りおっかよう～戸隠追通地区のセーノカミのカンジン～

正月の15日前後に行われる小正月の行事のうち、市内の西部山間地域に位置する芋井地区や戸隠地区では昭和30年代頃まで、道祖神(セーノカミ)のカンジンと呼ばれる行事を行っていました。

道祖神のカンジンは、15日の早朝に子どもたちが道祖神のご神体を持って家々を回り、お賽銭としてお金やお菓子を貰って歩くというもので、参加する子どもたちにとっては小遣い稼ぎの場ということもあって、とても楽しい行事であったようです。昭和30年代以降、山間地域の過疎化や高齢化に伴い、子どもの数が減少したことや、家々を回って金銭を強要するような行為は教育上よろしくないといった理由から、行事を取りやめる集落が相次ぎましたが、その後地域の伝統行事を大切にしていこうという思いから、行事を復活させたところもあり、現在でもいくつかの集落でこの行事が行われています。

戸隠と鬼無里との境に位置し、裾花川のそばに立地する戸隠追通地区もカンジンの行事を今も伝える地域の一つです。ここでは今年の追通地区のカンジンについて紹介してみたいと思います。

追通地区ではかつて、14日には鳥追い、そして翌15日には道祖神のカンジンとドンド焼きといった行事が行われていました。その後これらの行事はドンド焼きを除き一時期途絶えてしまいましたが、昭和49年に復活し現在に至っています。ただし復活にあたってそれまで別々の日に行われていた鳥追いとカンジンが一緒となりました。

1月13日の朝8時30分頃、追通地区の生活改善センターに子どもたちが親に伴われて集まってきます。子どもたちは片方の手に鳥追いのときに使う竹の棒を持ち、もう片方にはカンジンのときに使うヌルデと藁で作ったオンマラと呼ばれる道具を持っています。この日集まった子は10人。現在の追通地区の小中学生全員です。昭和20年代頃のカンジンには50～60人の子どもが集まったというので、それに比べると6分の1の数です。

センターに集まった子どもたちは二手に分かれて集落を回ります。かつては子どもが主体で参加は男の子に限られ、一緒に回る大人は一人ぐらいだったといいます。しかし現在は男女の区別はなく、子どもには親が必ず同伴し、行事の進行も親

ごさんの先導によって進められます。

カンジンの行列が家に到着すると、まずは庭先に出ている物干し竿を竹の棒で叩きながら「鳥追いだ 鳥追いだ 雀まじなドンの鳥追いだ 今年は豊作なるように ホーイホイ」と囃して鳥追いを行います。鳥追いは一年の初めにあたって稲の害鳥であるスズメを追い払うお呪いの行事です。鳥追いの囃しが終わると、今度はカンジンに移ります。外にいた子どもたちは手に持っていた竹の棒をオンマラに替え、玄関を開けて家の中に入り、「セーノカミのカーンジ 錢でも金でも入るように」と囃しながらオンマラを家の中に投げ入れていきます。オンマラには細縄が付けられており、家の中に投げ込んだオンマラは細縄をたぐって手元に引き寄せ、また投げ込みます。この動作を2、3回繰り返す行くとカンジンを受けた家からお賽銭が子どもたちに渡されます。昔はお賽銭をなかなかあげずに、子どもたちにもっと気合を入れて囃すようにけしかけたり、子どもたちもお賽銭の金額が少ないと、もっと貰えるまで囃し言葉を唱えながら繰り返しオンマラを家へ投げ込んだといいます。

このようにして順に家々を回って歩き、午前11時頃には二手に分かれていた子どもたちが生活改善センター近くの数軒を残して合流します。そのあとは全員で残りの家を回り、地区の約80軒の家を3時間ほどかけて回り終えました。

全ての家を回り終えるとカンジンの一行は生活改善センターに帰り、子どもたちがお昼をとる間、育成会長ら役員はカンジンでもらってきたお菓子とお賽銭を人数分に分け、最後に参加した子どもたちへあげて、行事が終了しました。

(細井雄次郎)



『体感！川中島の戦い2007』終了

2007年3月24日～12月24日まで、特別企画展『体感！川中島の戦い2007』が行われた。入場者数は222,598人と過去の博物館入館者数のレコードを塗りかえる、大勢の方にご来場いただいた。

この企画展では、博物館での新しい試みがいくつか行われた。1つは、企画展が長野市長を会長とする「風林火山・プロジェクトながの実行委員会」という実行委員会方式で行われたこと。委員には区長会を中心とする地域の地域団体、商工団体、旅行業者、交通業者、各観光協会などの協力、支援を得た。こうした様々な団体と協働できたことは、今後の博物館活動の幅を広げる意味で有意義であったと思われる。



にぎわった企画展会場

2つ目は、271日という長期開催となったこと。開催中の休館日は燻蒸期間（7月9日～13日）のみでほぼ無休で行ったこと。7月28日～8月19日の間は、19時までの開館時間の延長を行ったことなどの運営面での取り組みである。条例で定められている休館日や開館時間などは、時には来館者の動向と合わないこともあり、柔軟に対応できた今回のケースは今後のテストケースといえる。

3つ目は、ドラマ出演俳優を呼んでのイベントや、観光キャンペーンとの連携。オリジナルグッズの販売、リンゴ、豚汁の振る舞いなど誘客面でのアプローチがあげられる。多様化する博物館利用者への対応、門戸を広げるという意味で効果は大きかった。

4つ目は、「川中島の戦い」語りべの会という市民ボランティアによる古戦場ガイドが行われたことである。もともと八幡原史跡公園には年間20万



最終日の豚汁の振る舞い

人以上の観光客が訪れるのに対し、博物館の入館者数はその何十分の一かに止まっていた。この史跡公園と博物館とをつなぐ人の輪として、ボランティアガイドの活動は心強かった。今後もガイドは継続されることが決まり、さらに博物館内の展示解説にもガイド範囲を拡大するなど、市民ボランティアと博物館の協同により、史跡公園一帯の活性化につながればと期待される。



古戦場での語りべボランティア

以上、いくつかの試みを紹介してきた。今年の7月には「ミドルヤード」という、これまでの博物館に無い新しい概念の戸隠地質化石博物館がオープンする。「ミドルヤード」とは、「資料」と「人」と「情報」を利用者と博物館が共有するスペースを指し、この空間から新たな情報発信を行うというものである。今回の企画展での試みを、ミドルヤード概念とも結びつけ、市民の日常空間として、博物館を多くの人たちが気軽に利用し、資料と人、人と人が出会う場となるよう、この企画展を今後活かして行きたい。結果はすぐには出ないが、きっと新しい芽を出すに違いない。

(降幡浩樹)

平成19年度長野市埋蔵文化財センター発掘調査速報展「善光寺を掘る！」

平成19年度は善光寺周辺の3地点で発掘調査を実施いたしました。大本願明照殿地点・仁王門東地点は善光寺寺域内で初の発掘調査となります。いずれの調査においても報道機関による取材があり、テレビ・新聞等で報道されました。報道後には出土品の展示に関する問い合わせが相次ぎ、善光寺の発掘調査に対する皆さんの並々ならぬ関心の高さが感じられました。

埋蔵文化財センターでは、現地での発掘調査終了後、出土品の洗浄や接合といった調査結果の整理を進めてきました。ようやく作業がひと区切りを迎えたことから、善光寺周辺3地点の発掘成果について速報展示を開催し、出土品を公開することいたしました。

大本願明照殿地点から出土した瓦は「湖東式」と呼ばれる瓦で、これまで知られていた「善光寺瓦」とは系統が異なります。善光寺創建や古代善光寺を巡る謎に一石を投じるとともに謎を更に深めるものとなりました。近世遺構も確認されていて、天目茶碗や京焼茶碗の出土は「さすが善光寺！」と思わせます。仁王門東地点では、中世善光寺の

寺域造成に関わる土木工事の跡が確認されています。「巴文（ともえもん）」と呼ばれる文様を施した中世瓦も出土しています。中世善光寺は源頼朝が参拝したとも伝えられ、注目される時代です。八幡屋磯五郎店舗地点では善光寺門前の戦国時代（16世紀）の様子的一端が現れました。

3カ所の発掘調査は時代も場所も異なっていますが、その時々善光寺とその周辺の姿を現代の我々に伝えています。善光寺中心部の発掘調査ではありませんが、善光寺を取り巻く地点の調査結果から古の善光寺に思いを馳せていただければと思います。（風間栄一）



▲仁王門と調査地点（大本願明照殿地点）

展示室の道祖神が新しくなりました！

皆さんは博物館の常設展示室2階にひと際大きな顔をして立っている大岡芦の尻の道祖神（レプリカ）をご存知でしょうか？1998年に開催された長野冬季オリンピックの開会式に登場し、一躍有名になった人形道祖神です。

博物館では1984年に開催した企画展「ワラと生活」のときに芦の尻集落の皆さんにお願いをして、企画展の展示品としてレプリカを製作してもらい、展示終了後はいつでもこの立派な顔の道祖神を見ようように常設展示室に移しました。

それから23年余りが経ち、途中一度、芦の尻道祖神祭り保存会の方々に修復をお願いしたことがありましたが、ここ14、5年は手を加えずそのままの顔で展示してきました。大岡芦の尻にある本物の道祖神は毎年正月7日になるとワラで新しい顔に作り変えます。しかし博物館の道祖神はずっと同じ顔で博物館に来る見学者を迎えてきました。そのため最初は威厳のある立派な顔だったが、長い歳月の間にくたびれ、最近では神様というよ

り怪物のような風貌になっていました。

そこで博物館では保存会の方々をお願いをし、十数年ぶりに道祖神の顔を新しくしました。皆さん新しい顔に生まれ変わった道祖神をぜひ見に来てください。（細井雄次郎）



（修復前）



（修復後）

新収蔵資料紹介 北条のお寄り講本尊

今年度も多くの方々からさまざまな資料を寄贈いただきました。ここでは長野市北条からいただいた、お寄せ講の本尊を紹介したいと思います。

観音開きの四角い厨子の中に仏閣型の厨子が納まり、その中に「親鸞聖人」と記された御名号と呼ばれる掛軸が掛けられているこの資料は、北条の浄土真宗の家の間で行われていたお寄り講と呼ばれる集まりのときに、ご本尊様として祀られていたものです。浄土真宗では真宗門徒が年に何回か時期を決めて集まり、僧や説教師の法話を聴き、信仰を深めるためのお講を開くところが多く見られます。北条でもお寄せ講という名で、農閑期の1月から4月と11月・12月にそれぞれ当番を決め、当番宅を会場に講を開きました。当番は1回ごとに交代していたので、会場も1回ごとに変わり、そのたびに高さ129cm、幅69cm、奥行き36cmとかなり大きいこの本尊が講員の間を行き来しました。その証拠に厨子の裏には穴の開いた突起部と、縄の残欠が残っており、当時は背負って運べるようにしていたことがわかります。



明治40年に20名もいた講員は平成5年には5名に減じ、年に6回ほど開かれた講も、年に1回、さらには休止となり、講の当番も、本尊を保管しておく役割に変わりました。その当番も一年ごとだったものが数年間ごとへと変わり、講の実態が失われたため、今回博物館へ寄贈となりました。

北条には、他にオカノエ講もありましたが、お寄り講のメンバーは加入していません。地域の信仰習俗を受け入れない傾向が強い浄土真宗の家にとってお寄り講は、地縁的な相互扶助組織としての性格もあったのかもしれませんが。

(細井雄次郎)

平成19年度寄贈・寄託・購入資料

平成19年度も多くの資料の寄贈・寄託をいただきました。厚くお礼申し上げます。(敬称略・順不同)

(寄贈資料)

紙製ドラム缶	穂刈正行 (篠ノ井石川)
雛道具ほか	柳澤一夫 (鶴賀緑町)
昔の教科書	轟 軒治 (大豆島)
提灯製作道具ほか	市川千晃 (岡田町)
指物道具	猪飼繁知 (三輪)
昭和7年正月の新聞	長沼公民館
食籠ほか	内田 誠 (往生地)
そろばん	松澤重信 (安茂里)
蓄音機ほか	寺嶋亮吉 (権堂)
お寄り講ご本尊	海野幸一 (高田)
水車	大沢 莉 (松代町清野)
望遠鏡	藤本 茂 (吉田)
土人形の型	太田 廣 (南千歳)
かいまき	相澤 傳 (神明)
一升枧ほか	長岡トメ子 (箱清水)
桶屋資料	渡辺享則 (青木島町)
オンマラ	徳武哲也 (戸隠)

(寄託資料)

五反幟	南高田区
中沢和夫家文書	中村孝代 (東京都)
六文銭付甲冑ほか	丹羽重徳 (岐阜県)
北堀区有文書	北堀区

(購入資料)

上杉謙信像



上杉謙信像



六文銭付甲冑